

拜啓「バンジージャンプ」様

唯一『守りに入った』というセリフで当たっているところがあるとしたら、自分の命を『守りに入った』ということですよ。

まさしく、私がいろいろやった危険な仕事の中でも、あなたは忘れられない仕事の一つです。

自分で言うのもなんですが、私がやったあと、いろんな人がいろんな所で、あなたをやるようになりましたが、100m近い高さから飛んだ人は、私の中では見たことがありません。ほんとうに、うれしいやらくやしいやら、よく分かりませんが、ありがとうございます。ざいます。

どうしてあなたのような仕事をしてしまったのでしょうか。一時私は、仲間うちで「日本の芸能人で初めてバンジージャンプをやった男」と、これまたうれしいやらくやしいやら、よく分かりませんが、ふざけた肩書きをつけられてしまいました。すべてあなたと出会ってしまい、挑戦してしまっただまものです。ほんとうに思い出したいくらい、ありがとうございます。

ほんとうは、あなたという仕事を一ヶ月くらい断り続けていたんです。いくら命知らずなことばかりやってきた私といえども、

あなたというのは、自殺行為だと思いました。だれがそんなことを考えて、だれがそんなことをやりだしたんだと、なんかよく分かりますが、一人で恨んだぐらいです。しかし、プロデューサーの無言の圧力と、レギュラー番組に少しでも貢献したい気持ちと、言われてしまえば最終的に逃げることでできない芸人としての私のサガが、あなたをやらすはめになったのです。

しかし、今から考えても、実にあなたは怖かった。100 m 近い高さから見た、下を流れる溪流の景色。景色というのは見るためにあつて、飛ぶためのもんじゃありませんよ。実にあなたは罪な奴です。好きで入った道ですが、あの100 m ぐらいの高さに設けられた飛込み板のような板の上で、この道に入ったことを、ほんと、恨みました。

あのディレクターの「島崎さん、いつでもいいですよ。好きなときにどうぞ」というノーテンキなセリフ。インストラクターの「飛べ、飛べ」という血も涙もないセリフ。ほんとうに人間不信になり、人間をやめてもいいとまで思いました。

テレビのオンエアでは、飛ぶまでに5秒ぐらいでしたが、実際にはど分ぐらいかかったんじゃないでしょうか。キレルとか、お

かしくなるとか、気がフレルというのは、あの時の飛ぶ前の私の心境のことを言うのではないでしょうか。ほんとうは失禁したくなるぐらいビビッているのに、なぜか急に笑いたくなるような自分を、たしかに私はあの時感じてしまいました。

まさしく、私は正常と異常の境目にいたような気がします。思えば、私はあなたに限らず、なにかにとりつかれたようにいろんなことをやりました。スカイダイビング、ワニとプロレス、トラとキス、お城の金のシャチホコ、人間花火、人間ハエトリ紙、人間書き初め、飛行機の羽根の上に突っ立って上空を旋回

等々……。

思わず涙が出るほど悲しい気持ちにさせられたのは、子どもを連れて動物園にプライベートで行った時のことです。見る動物、見る動物、ほとんど仕事で絡んだことのある動物ばかりなんです。まったく絡んだことのない動物を探すほうが難しいくらいでした。

これだけいろんなことをやってきた私ですが、その中で発見したことが一つだけあります。“怖さ”という感情は、“怖い”という単純な一つだけの感情ではないということです。その“怖い”という中には、いろんな“怖さ”があるということです。

よく100 m近い所から飛んだ、あなたをやったあと、東尋坊の20 mぐらいの高さをなぜ飛べなかったんだと言われたことがあります。当事者の本人からすればまったく“怖さ”の質が違うということです。100 m飛べたから20 mぐらい飛べるとか、そういうものではないんです。まあ、これはやったことのない人には、頭の中ではある程度察することができても、100%は絶対に分からない感情だと思います。

最近、こういうことに関して思っていることがあります。それは、あなたのような私がいろいろやってきた、いわゆる危険でバカな仕事というのは、芸人というよりはむしろ単純にスポーツだということなんです。それはもう、そういうことをうんざりするぐらいやってきて、そして実際に死んだと思ったことや、死にそうになったこともいっぱい経験してきた私が出した結論と言ってもいいでしょう。

自分の体が動かなくなったり、自分の運動神経が鈍ってきたりすると、それはもう単純に危険だということです。そういう仕事を断ることによって、よく私も言われましたが、いわゆる「守りに入った」とか、そういう問題や次元ではないということです。

何度も言うようですが、危ないということです。死んでしまうという事です。よく「命をかけて」と言いますが、いくら好きない道でも命をかける必要はないということです。命までかけられたら、かけられたほうも戸惑ってしまうでしょう。この道は、自分の人生はかけても、命までかけるほどのものではないのです。

スポーツ選手はみんな、自分の体に限界を感じれば身を引いていきます。それと同じことです。最低限自分を守れる運動神経や体力がないと、決してやってはいけない分野だということです。

これがなかなかわかってもらえないのです。決まって言われるのは「守りに入った」、これです。私から言わせれば、“守る”ほど私に地位や名誉やステイタスがあるとでも言うのでしょうか。

守りたくても、どちらかというところがないくらいじゃないですか。唯一「守りに入った」というセリフで当たっているところがあるとしたら、自分の命を「守りに入った」ということです。

私は芸人やタレントはどこか、ソープランド嬢と同じようなものなんだと思いますが、自分の命まで売る必要はないと思っています。ます。

バンジージャンプ様、あなたなら私の気持ち、分かってください

いますよね。あの飛び込み板の上で、あなたという“怖さ”と20分もど分も戦った仲ですものね……。

追伸

こうやって書くと、弱音をはいたように思えますが、そうではないのです。

私はお笑い芸人としての、こういう最低をつかさどるような仕事は大好きです。私の芸に対する考え方のベースが、こういう仕事にあると思っています。要は、スピリットの問題です。そういう命までかける仕事は、もうしようとは思いませんが、スピリットは絶対なくしません。

私は最高も好きですが、最低もそれ以上に好きなところがあります。あしからず……。